2023年度　自己評価

１　保育の計画性

　週日案の様式が定まり、各週をまとまりとして捉え、計画的に保育を展開できるようになっている。また、避難訓練等の各指導案において保育の意図性をしっかりと言語化できる能力も向上している。保育記録についても、年間を通して、どの時期にどのような記録を取っていくのかについても、共通理解ができた。

一方で、計画の中にある合理性やスムーズさを優先するあまり、それが子どもの育ちを支えることになっているのか、子どもの力を発揮したり、理解を促したりできる環境なのかという点で、疑問を呈する場面が時々見受けられた。子どもを育てるためには、敢えて寄り道をしたり、敢えて不便さをつくったり、保育者の側に多くの労力をわざわざかけることの方が大事であることが多い。大人の合理性を優先することと子どもを育てることの区別ができない保育者がいることは残念である。その都度、指摘していく中で、何のためにそれをしているのかという自覚を促したい。

２　保育の在り方、幼児への対応

　2023年度は、視覚支援の充実を図ることができ、その効果を実感できる出来事がいろいろとあった。視覚支援の定着が見込まれる。子どもが「分かる」ことにこだわり、環境の構成を整えていく姿勢は、今後も大切にしたい。特に特別支援の子どもたちについて、まだまだ、その子どもの「分からなさ」を理解し、そのための手立てを考えることが洗練されているとはいいがたい。関係機関との連携を深め、学んでいく姿勢が引き続き重要である。

2023年度は、保育者と子どもの人間関係のよさが非常に感じられた。子どもの心に寄り添う姿勢がどのクラスにも見られ、子どもの安心につながっている様子があった。これを若草幼稚園の文化としてつなげていきたい。

一方で、先ほど述べたように、大人の合理性と子どもの育ちが両立しない場合があることを自覚し、子どもにとっての環境の構成を常に考えてほしい。

３　保育者としての資質や能力・良識・適性

　保育者の能力と配置についてバランスの取れた年であったため、基本的に園全体が落ち着いていた。子どもたちの力強さに助けられている面もあり、今後は、もっと保育者のモデル性や失敗をおそれない挑戦意欲や限界を超えようとする力強さが強化されると、園の活性化が促されるだろう。

　現代的な課題として、子どもも若い世代も、さまざまな負荷を乗り越えていこうとする意欲や、それを乗り越えたときの喜びが薄い傾向にある。現在は、保育者集団の年代的バランスが取れており、さらに若手の保育者としての良識や適性が若草幼稚園の文化を共有できる状態にあるが、定年退職が今後相次いていく中、先の見通しは明るいものではない。実習生の指導について工夫を図りながら、未来の保育者確保に尽力したい。

４　地域の自然や社会とのかかわり

　自然とのかかわりについて、各学年とも子どもたちの個性に合ったテーマを選び、活動を積み重ねていくことができた。ただ、方向性を定めることに時間がかかり、そのための環境の構成が遅れたため、子どもたちのスキルが追い付かなかった側面もある。保育者自身が、迷いを試行錯誤に変えていろいろとやってみる姿勢が重要である。

保幼少連携事業については、合理性を優先した活動になっている。職場環境にゆとりが必要ではないか。療育方面とは、連携が密になっている。専門家の意見を聞き、統合保育に生かしている点は、大きな成果である。

５　研修と研究

　本年度も外部講師による園内研修を行い、保育の質についてこだわった思考を重ねることができた。担任保育者の計画性や試行錯誤のスキルが向上していることで、研究的態度も身についている。今後は、外へと自分の保育を表す機会を設けていきたいと考えている。

生活発表会では、共立女子大学の田代先生にご指導いただいたが、まだ劇を構造化し、分析する力が弱い。実際、本園の取り組みは非常に難しく、レベルの高いものであることは事実だが、できていることとできていないことの理由を自分でわかっていないところがあるため、迷子になってしまうことが多々ある。劇の取り組みを通して、子ども理解をより洗練させていってほしい。

また、必要に応じてキャリアアップ研修等の県主催の研修にも参加している。一人一人の保育者が、自分たちの専門性を理解し、説得力を持って、自分の保育を語ることができるようになっており、保育買いがめざすべき方向にきちんと向かえている状態である。